

氏名	馬淵 沙弥佳
学位の種類	博士 (医学)
学位記番号	甲第698号
学位授与年月日	令和8年3月19日
審査委員	主査 教授 矢野 貴久 副査 教授 内尾 祐司 副査 教授 山本 昌弘

論文審査の結果の要旨

骨粗鬆症は骨強度の低下により脆弱性骨折のリスクが高まる骨格疾患であり、高齢化が進む先進国ではその有病率が増加している。本研究は、高齢化が進んだ中山間地域の病院での骨粗鬆症マネジメントの実態を明らかにすることを目的とし、女性患者における骨粗鬆症検査受検の有無などを、病院の電子カルテデータを用いて解析した。研究デザインは後ろ向き横断研究である。WHOにより閉経後の65歳以上の女性に骨粗鬆症検査が推奨されていることから、本研究では総合診療科定期外来に通院する65歳以上の女性を対象とした。主要評価項目である骨密度 (BMD) 検査の実施率は、対象者984名中137名の14%と低かった。ロジスティック回帰分析では、年齢が高齢になるほどBMD検査が実施されていないことが示された。また、要介護者では有意に検査実施率が低かった。一方、Bisphosphonate治療を受けている者、ならびに整形外科医による診療を受けている者は、BMD検査の実施率が有意に高いことが明らかとなった。加えて、骨粗鬆症の治療実施率は、検査実施率14%を上回った。これらの結果は、検査が必要な骨粗鬆症リスクを有する者や骨粗鬆症患者に対して十分に検査が実施されていない現状が示唆された。骨粗鬆症が引き起こす脆弱性骨折患者が増えることにより、個々のADL低下や健康寿命の短縮、ひいては医療費増大へと直結することから、医師などの医療従事者が骨粗鬆症マネジメントへの関心を高めることが重要と考えられた。同時に、骨粗鬆症検診普及など骨粗鬆症について一般市民への啓蒙の必要性が示唆された。本研究は、地域の実情にそくした骨粗鬆症の適切な診断と治療介入ならびに脆弱性骨折の予防活動を展開する上で、有用な知見と考えられた。